



1 民話とはなにか？

1-1. 民話

民話という言葉は、英語のフォーク・テイル(folktale)、ドイツ語のフォルクス・メルヘン(Volksmärchen)、フランス語のコント・ポピュレール(Conte populaire)などの訳語で、そのほかに民間説話、民衆の話などとも訳されています。

民話は、文字どおり民衆の間に語り継がれた話ですから、広い意味では神話、伝説、昔話のほかに叙事詩や寓話のように書承の優位なジャンルから、世間話や体験談のように現在生まれつつある話まで幅広い領域をカバーする言葉です。

しかしもっとも狭い意味では、日本民俗学でいう「昔話」という用語と同義であると言ってよいでしょう。

民話という用語の定義については、各国の研究者の間でも様々の意見の相違があり、統一されてはいませんが、それはそれぞれの国の歴史や文化の違いによることが大きいのです。我が国でも民話とほぼ同じ意味で、メルヘン、妖精物語、お伽話、童話などという言葉が使われることがあります。それぞれに言葉の歴史や翻訳・移入の事情があります。そこで本書では、民話という言葉に「民衆の間に語り継がれた話」というもっとも広い意味で用います。

1-2. 神話

万物の創造や起源について語り、世界の存在そのものを基礎づける神話は、国家の成立や民族の世界観と信仰体系と深く関わり、通常は昔話・伝説と区別して考えられていますが、じつは深い関わりをもっています。

ことに世界各地の少数民族の語りの中には、ウサギやカラスやコヨーテやクモなどさまざまな動物を主人公にしたトリックスター話が伝えられています。これらの動物たちは、時には愚かで愉快な失敗を繰り返しますが、時にはまた人間の生活に欠くことの出来ない火や水や食物やさまざまな技術をもたらす文化英雄としての役割も果たします。

またエスキモーの「海の女神セドナ」のように、異類婚姻譚の不幸な結末に鯨やアザラシの起源の結びつく話もあります。さらにまたアイヌの神謡であるカムイ・ユーカーラにも「ハンチキチ」のように、動物昔話とあまり区別できない話もあります。

かつてはグリムや柳田国男のように「昔話は、神話の墮落したものである」という見方が支配的でしたが、このような神話と昔話・伝説との関係を見るとどちらが先とも結論はつけられません。またそこから一步進んで、ドイツのバウマンのように神話昔話(Mythenmarchen)という新しいジャンルを考える研究者もいます。

1-3. 伝説

伝説は、実際に起こったと信じられる異常な出来事を語るものです。ヨーロッパの各地には、今でも小人や水の精にで会った不思議な体験が語り継がれていますし、野のはずれには、妖精の丘や城や石が残されています。これらは自分たちの町や村の成り立ちにまつわる人々の経験の集積ですから、昔話と違って特定の形式を持ちません。「ハーメルンの笛吹き男」のようにその土地を訪れた不思議な人や、聖人の奇跡や恐ろしい戦いの記憶が、寺院や館や池や大木などの具体的な土地や建物や時代に結びついて語られるのです。

伝説にはまた、由来話、説明伝説と呼ばれるものごとの「いわれ」を説く話があります。これも地域と結びついて、「なぜあそこに山ができたか」、「どうしてあの泉の水は枯れないか」などと土地にまつわる話をしたり、祭の由来を説く場合もありますが、「イエルバの木はなぜ枯れないか」、「カバはなぜ水の中に棲んでいるのか」のように植物や動物の特性を説く話もあります。由来話はさらに、人間の死の起源、男と女の区別のいわれなど、人間生活や宇宙創造の根源に遡ることもありますから、神話とも重なる領域です。

1-4. 昔話

神話や伝説と違って、昔話は話の舞台となる場所や時代も特定されず、語りも聞き手も嘘と承知の上で話を楽しむためか、語りの形式は、きちんと整っているのが普通です。

昔話は「冒頭に必ずムカシという一句を副えて語る<ハナシ>であり、「この発端の句が昔話という名称の起こりでもある」と述べたのは柳田國男ですが、こうした語りの形式は世界中にあります。たとえばフランスの場合、発端句はたいてい「ムカシ」と平凡ですが、結末句には「あいつ〔主人公〕は俺〔語り手〕より出世して、何不自由ない御身分で、俺は今でも苦勞する」といった類の面白い言いまわしが残されています。

フィンランドのアールネとその仕事を継承したアメリカのトンプソンは、昔話を動物昔話、本格昔話、笑話と小話、形式譚の四つのジャンルにわけ「昔話の話型」(The Types of the Folktale)を、完成させました。これはインド・ヨーロッパを中心に中近東、アメリカ大陸などの昔話を分類・整理し、ATという話型番号をつけてカタログ化したものです。アールネとトンプソンがここで採用した話型(タイプ)という概念はとても大切です。

世界中で語られる話の数は無数で、ごく限られた形式譚を除いては、一言一句一致する話はありません。しかしたとえば日本の「鉢かづき」とフランスの「ロバの皮」のように、地域や時代をこえてよく似た話が各地に見られます。この場合、この二つの話はまずAT510として継子話の「シンデレラ」の仲間として分類され、つぎにAT510Bとして「鉢」や「ロバの皮」といった魔法の品による変身のモチーフのない標準型の「シンデレラ」(AT510A)と区別されるのです。

『昔話の型』には、二千五百の話型が用意されていますが、それだけで世界中の昔話をカバーするのは不可能です。そのために各国の研究者が、アールネとトンプソンの仕事を尊重しながら独自のカatalog作りを試みてきました。日本の関敬吾やフランスのポール・ドラリュの仕事は、中でも優れたものです。

1-5. 本格昔話

人間を主人公とした複雑な構成をもつ昔話のことです。アールネとトンプソンは、これに約八百の話型を用意し 1 魔法昔話 2 宗教的昔話 3 伝奇的昔話(ノヴェラ) 4

愚かな鬼の昔話 の四つの下位区分を設けました。

本格昔話の中でも、もっとも昔話らしいふしぎに満ちているのは魔法昔話です。そこには、魔女や巨人や小人の棲む他界で繰り広げられる主人公の冒険が語られています。主人公は、自らの未熟さや敵の畏によって再三ピンチに陥りますが、超自然的な援助者や魔法の品物のおかげで最後には勝利し、王女や宝物を手に入れるのです。

この魔法昔話の魔法の要素がうすれ、宗教的な奇跡や教訓がそれにかわる働きをするのが宗教的昔話です。そしてさらに奇跡がむしろ人間の営みとなり、魔女や巨人や悪魔との戦いが人間関係の口口や試練にかわると伝奇的昔話となります。

愚かな鬼の昔話の場合には、超自然的な敵対者が人間に騙されからかわれて、すっかり迫力を失い格下げされてしまっているのです。

ヨーロッパで、メルヘン、妖精物語と呼ばれる話は、もっとも狭い意味では魔法昔話をさすと言ってもよいでしょう。

1-6. 動物昔話

「しっぽの釣り」や「狼と七匹の子山羊」のように、動物たちを主人公にした物語です。日本の「カチカチ山」や「ブレーメンの音楽隊」のように人間が登場することもあります。その役割はそれほど大きくありません。

『昔話の型』には、ヨーロッパを中心とした動物昔話のほぼ三百の型が用意されていますが、その源には 1 インドの『パンチャタントラ』や『ジャータカ』、ギリシャの『イソップ』などの古代の寓話集 2 ドイツの『ラインケ狐』やフランスの『狐物語』などの中世の動物譚 3 純粋に口頭による伝承 の三つの系列が考えられるといわれています。

寓話は、はっきりとした道德目的をもって語られる動物昔話で、「カラスとチーズ」「鳥の王様」「町のネズミと田舎のネズミ」など誰でも知っている話があります。

『狐物語』や『ラインケ狐』は、ヨーロッパ中世の動物叙事詩です。ずるがしこい狐のトリックスターが、愚かな狼をはじめ、ニワトリ、猫などを騙し、からかい、悩ましながらついに高官に出世する話ですが、そこには「しっぽの釣り」「蛙の王様」など世界各地に分布するエピソードがいくつも含まれています。

純粋な口承による動物昔話は、語りのもっとも豊かな領域です。ことに少数民族の昔話には、トリックスターや文化英雄としての動物の活躍が多くみられ、とても『昔話の型』のリストには収まりきれません。

1-7. 笑い話

聞き手を笑いに誘う短い小話は、構成が単純で覚えやすく、大人にも子供にも愛されるため、世界中で語り継がれています。笑い話の代表的主人公である愚か者ばかりを集めた愚か村も、イギリスのゴーサム、ドイツのシルドビュルガーなどいたるところに見られます。

笑い話の世界では、世俗の権力や道德や知識はあまり役にたちません。そこは、むしろこの世の秩序が逆転する見事な反世界だといえるでしょう。日頃いばっている王様や役人が笑いのめされるのも一般のことで、しかめつらしい坊さんも、実は好色で欲ばりで、きわどい艶笑譚の種になります。

嘘つきや泥棒が大活躍するのもおなじみで、「勇敢な仕立て屋」や「幸運な一発」の場合はそれほど罪はありませんが、日本の「俵薬師」と同型の「ユニボス」などは、むしろ残酷

と思われるほど悪が勝利します。世界各地で数多く語られている「泥棒の名人」では、夜の稼業の修業をつんで帰った若者が、領主の難題をつぎつぎ解いて、しまいには領主の寝ている寝室のシーツまで盗んでしまいます。

こうした不道徳と言うよりも無道徳とも言うべき秩序破壊的な主人公は、日本の吉四六や彦一と同じ知恵者であり、動物昔話のウサギやクモのもつパワーを秘めています。

1-8. 形式譚

もっとも短いタイプの話です。言葉の遊戯性が強く、その形式の面白さによって聞き手をひきつけ、時には語り手の場の雰囲気を作り出す大切な役割をはたします。「果てなし話」「だんだん話（累積譚）」「杵物語」などがあります。

インドのパンジャブ地方の果てなし話「いつまでもお話を聞きたがる王子」では、貧しい木こりの娘が、話の大好きな王子に《網の中の何千何万という小鳥が、網の中から一粒ずつ穀粒を盗みだす話》をして、「小鳥が穀粒を一つ、くちばしにくわえ、左を見て、右を見て、穴に入って抜けだし、さっと飛び去りました」と何か月も語り続け、ついに王子の心を手にいれます。

この話にはまず、妻に毎晩話をせがみ、話が絶えると妻を追い払ってしまう王子というエピソードがあり、つぎに娘の語る果てなし話がいります。そして最後に娘の成功と結婚のエピソードがきます。ちょうど額縁のように、一つの話がもう一つの話のグループを囲んでいるのです。このタイプの話は、杵物語と呼ばれています。『千一夜物語』などでおなじみのパターンですが、インド、中近東、イタリアなどに多く見られます。

単純な話の繰り返しである果てなし話にひと工夫して、繰り返しのたびに話に新しい要素をつけ加えていくのが、だんだん話です。日本でもよく知られた「大きなぶ」「ネズミの嫁入り」やアフリカの「大食いのひょうたん」、イギリスの「逃げるホットケーキ」「おばあさんと豚」などはこのタイプです。ことばがリズムカルですから、マザー・グースの「これはジャックのたてた家」のように唄になっている話も各地に見られます。

1-9. まとめ

神話

- ①真実であると信じられている報告（物語）である。
- ②創造的原古であって、このときすべての本質的なものが基礎づけられ、今日の事物や秩序が作られた。
- ③存在するものを単に説明するだけではなく、基礎づけ、証明するものである。
- ④神話に語られる原古の出来事は、今日でも語る者と聞く者の関心の対象であるから、その意味で時間をこえている。

伝説

- ①舞台はだいたい確定した周知の場所である。
- ②創造的原古であるよりも、それより後の歴史的な過去の時代である。
- ③登場人物も歴史的に実在した人物と考えられる。
- ④真実であると考えられる物語である。

昔話

- ①本質的に娯楽的な、しばしば詩的な説話であって、呪術的・宗教的な世界（他界）から発

する奇跡の要素を応用することによって生ずる「劇的なヤマ」がある。

②神話のような真実をもたず、世界観とは直接関係のないことが多い。

③原古における一回的な過程を描くのではなく、どこでもいたるところで、あらゆる身分の典型的な人間によって体験され、成功するような典型的な出来事を描く。

2 民話の研究

2-1. 十九世紀の民話研究

民話は、おそらく人類の発生とともに始まるきわめて古い歴史を持っています。しかし民話の研究は、十九世紀初頭ドイツのグリム兄弟とともに始まるといってよいでしょう。グリム兄弟は、民話を失われたゲルマン民族の神話の断片と考えて、砕け散った宝石のかけらを拾い集めるように一つひとつ大切に話を記録してゆきました。

こうして出来上がった『グリム童話集』は、一八一二年の初版から一八五七年の第七版に至るまでの四十五年の間に次第に豊かになってゆくのですが、同時に二人の民話に対する考えも大きく広がってゆきます。故郷のカッセルで集め始めたごく身近な話が、実はドイツやゲルマン民族の枠を越えインド・ヨーロッパ世界全体に広がりを持つことが分かってきたのです。

グリム兄弟のこのような考えを一步進めたのが、サンスクリット語の研究者であるマックス・ミュラーとテオドール・ベンファイです。ミュラーは、ドイツのデッサウ生まれの早熟の天才で、イギリスに渡り一八五六年に『比較神話学試論』を著します。彼はこの大著の中で、民話をアーリア民族の太陽や空や闇や嵐を中心とした神話に結びつけて解釈し、当時の人々に自然神話学派として幅広い支持を得ました。

一方ベンファイは、ミュラーよりもすこし年上でしたが、一八五九年にインドの説話集『パンチャタントラ』のドイツ語訳を出版します。ベンファイはその序文の中で当時ヨーロッパで知られた民話の大部分の話が、書物を通じてインドから伝えられたものだと主張しました。この立場はインド起源説と呼ばれ、やはり広い支持を得ました。

この二人の考えは、あまりにヨーロッパ中心であり、しかも文献に偏り過ぎていましたから、今日ではこれをそのままを信じる人はもういません。しかし最初に激しくしかも徹底的にこれを批判したのは、イギリスのアンドルー・ラングでした。ラングは『民話集』によって日本でもよく知られていますが、大変すぐれた人類学者です。彼は、ミュラーと同じく神話の研究から出発しましたが、文献のみにとらわれず広く未開社会の口伝えの話に目を向けました。そして彼は、インド・ヨーロッパだけではなく、アジアもアフリカもアメリカも含めた世界中のありとあらゆる民族の話に共通の構成要素（モチーフ）の存在することに気がついたのです。このことから彼は「世界中の人間は、その文明の程度にかかわらず、かつては必ず未開社会を経験している。民話や神話のモチーフは、その未開時代の人類の思考の記憶であるから普遍的なのだ」と結論しました。このラングの立場をそのまま支持する人も今ではもういません。しかし民話研究の視野を世界に広げた功績は、忘れることは出来ません。

十九世紀の後半はまた、ロシアのアファナシエフ、フランスのセビオーなどが活躍し、各国にすぐれた民話集の生まれた時代でもありました。

2-2. 二十世紀の民話研究

十九世紀の民話研究が、初期の神話学や人類学に結びついて民話そのものの発生や起源を問うという壮大なスケールのものであったのにたいして、二十世紀に入ると研究はより木目の細かいものになってゆきます。そこにはさまざまな考え方がありますが、現在日本でもよく知られている研究の流れを整理してみると、**a 国際比較研究** **b 構造研究**

c 心理学的研究 **d 文芸学的研究** の四つがあるといつてよいと思います。

a 民話の国際比較研究

十九世紀の後半から民話の記録が一層進み、世界各地に「しっぽの釣り」や「シンデレラ」のようによく似た話が存在することが分かってくると、「民話が、どこでいつ生まれたか」という発生についての関心は相変わらずですが、対象が個々の話に移り、それぞれの話の国際的な比較が始まります。その中でまず忘れられないのが、フィンランドのアールネの仕事です。

世界中の民話を比較し研究するためには、まず分類がしっかりしていなければいけません。そこでアールネは、話の構成要素であるモチーフとその配列がよく似た類話を集めて「話型」というグループを作り、さらにその話型を整理して分類カタログを作りました。これが有名な『昔話の型目録』です。アールネのこの仕事は、のちにアメリカのステイス・トンプソンによって補われ、話型にはすべてATのナンバーが打たれることになりました。現在ATのカタログには、全部で二千五百の話型が用意されていますが、もちろんこれでは足りません。そこで各国の研究者は、アールネとトンプソンの考えを尊重しながら、それぞれ自分の国のカタログを作ることになります。フランスのポール・ドラリュ、日本の関敬吾、朝鮮の□仁鶴などの仕事は、大変すぐれたものです。

ステイス・トンプソンは、話型のカタログのほかに六巻からなる大部の『民間文芸モチーフ索引』を完成し、さらに『民間説話』という分かり易い民話研究の手引きを書いています。また国際的な話型研究の代表としては、M. R. コックスやA. B. ルースの「シンデレラ」研究がありますが、それらは山室静の『世界のシンデレラ』に丁寧に紹介されています。

b 民話の構造研究

民話の構造研究は、一九二八年にソヴィエトの民話学者ウラジミール・プロップの著した『昔話の形態学』に始まるといつてよいでしょう。プロップは、この本の中でまず「機能」という概念を提起します。彼が「機能」と呼ぶのは、登場人物の行為のことですが、これが話を構成する最小単位となるのです。アールネを初めとする彼の同時代の研究者たちはみんな「モチーフ」を話の最小単位だと考えていました。しかしプロップによればこの概念はあまりに曖昧です。

たとえばここに「イワンが竜をやっつける話」と「ジャックが巨人を倒す話」があったとしましょう。これは、モチーフという視点に立てば、「竜退治」と「巨人退治」ですから二つのまったく違った話として分類されます。ところがプロップは、これを「主人公が敵を倒す」として一つの機能にまとめてしまいます。そのさい主人公が、イワンであってもジャックであっても力太郎であっても関係ありません。また敵も、竜であっても巨人であっても鬼であってもよいのです。

こうした考えにたつと、民話の中でももっとも複雑な構造を持つと考えられた魔法昔話も

わずか三十一の機能から出来上がっていることが分かります。しかもこの機能は原則として同一の順序で展開されますから、魔法昔話には実はたった一つしかタイプがないというおそろしい結論にいたってしまうのです。（ちなみにATのカatalogには、魔法昔話の話型が四百五十ほどあります。）

プロップのこうした大胆な試みは、長い間世界の民話研究者に知られることはありませんでした。しかし一九五八年にアメリカで英語訳が出版されると大きな反響を呼び、たちまち民話学の枠を越えて人類学や文学の研究に大きな影響を与えることになるのです。そしてさらにこの方法に改良をくわえ、アメリカのアラン・ダンダスやフランスのドゥニーズ・ポールムのように、たんにヨーロッパ中心の魔法昔話の分析だけにとどまらず、アメリカ・インディアンやブラック・アフリカの民話の構造を記述する研究者も現れました。彼らは、この方法を用いることによってそれまでまったく「形式を欠く」「野蛮な話」とされていた未開社会の民話にもしっかりとした構造があることを示したのです。

しかしプロップは、その生涯を民話の構造研究にのみ捧げたわけではありません。彼は、このほかにも『魔法昔話の歴史的起源』や『ロシアの昔話』といったすぐれた著作を残しました。これらの仕事は、広く日本に紹介されています。

そしてさらに民話の構造を考えるうえで忘れてはいけないのは、人類学者のクロード・レヴィ＝ストロースの仕事です。彼の神話分析の方法は、民話研究の上にも大きな影響を与えました。ことに彼の専門とする未開社会の神話は、民話と境を接していて区別することは困難なのです。その意味でも彼の方法の批判的継承者である日本の山口昌男の仕事（たとえば『アフリカの神話的世界』）は、きわめて刺激的です。またダンダスのすぐれた紹介者である池上嘉彦も『ことばの詩学』で、民話がなぞなぞやわらべ唄と同じ構造の枠組みで捉えられることを見事に証明しています。

c 民話の心理学的研究

民話の国際比較や構造論は、主として「民話がいづ、どこで生まれ、どんな仕掛けや形式を持っているのか？」に答えるものでしたが、「民話はどうな意味を持っているのか？人々はなぜ民話を語ったり、聞いたりするのか？」を考えるうえで、心理学的研究は大変役に立ちます。ことにこの分野で精神分析学の果たした役割は、忘れることは出来ません。よく知られている通り、精神分析学にはフロイト派とユング派の二つの大きな流れがあります。彼らはともに人間の意識の領域に働きかける無意識の働きを重視するのですが、フロイト派の人々が無意識をあくまで個人の領域にとどめようとするのに対して、ユング派の人々はそれを人類に通底するものと考えます。

民話に関するフロイト派の仕事は、フロイト自身の「症例狼男」や「小箱選びの三つのモチーフ」やオットー・ランクの「英雄誕生の神話」といったごく一部しか日本には紹介されていませんが、ほかにもフランツ・リクリンやゲザ・ローハイムの重要な研究があります。

フロイト派に比べてユング派の仕事は、日本では大変よく知られています。これは、河合隼雄を中心とした日本のユング研究者のおかげです。ことに河合隼雄は、ユングやその後継者であるM-L・フォン・フランツやE. ノイマンの考えを紹介するだけでなく、自らも『昔話の深層』や『昔話と日本人』のようなすぐれた民話研究を著しました。

ユング派が民話研究の領域で広く受け入れられたもう一つの理由は、彼らが民話そのものを深く研究したことにもあります。従来、民話研究者が精神分析学に対して抱いていたもっ

とも大きな不満は、「連中は、民話のことを何も知らずに勝手なことをいう」というものでした。たしかに「赤頭巾」にペローとグリムの二つの類話があることすら知らずに、赤頭巾の「赤」の意味とか狼の「呑み込み」の意味についてばかり語るのは困りものです。ユング派の人々はフロイト派に比べて、話そのものを自分たちの理論の犠牲にすることが少なかったといえるでしょう。

しかしその意味でもっとも注目に値するのは、ブルーノ・ベテルハイムの仕事です。ベテルハイムは、理論的にはフロイトやメラニー・クラインの影響下にありますが、なによりもまず自閉症の専門家であり、子供の精神分析に強い関心を抱いています。彼の『昔話の魔力』は「子供がなぜ昔話を聞きたがるのか?」「なぜ母親が、一番よい語り手なのか?」といった基本的な疑問から出発して、話を一つひとつ丁寧に検討してゆきます。もちろん昔話はほんらい子供のためだけのものではありません。また語り手も、母親だけではなくいろいろなタイプの人たちがいます。しかし現在の核家族化した家庭環境の中で民話を考えるときには、こうした視点も大切です。

民話の精神分析学的研究としては、このほかにエーリッヒ・フロムの『夢と象徴言語』を上げておくのもよいと思います。

d 民話の文芸学的研究

口伝えの文芸としての民話は、他には見られない独自の様式を備えています。たとえば話の語り初めと終わりの文句がきちんと決められていたり、三人兄弟譚のように同じ場面が三度正確に繰り返されたりするような形式的な約束は世界中に見られます。また話の展開の上でも、殺された主人公が生き返ったり、切られた首が繋がったり、非現実的な不思議が容認されていることも一般です。こうした民話の持つ文芸としての特徴の研究は、二十世紀の初頭からデンマークのA. オルリク、オランダのA. ヨレス、ドイツのF. フォン・デア・ライエン等によって進められてきました。なかでもライエンの『昔話』は、山室静によって日本にも紹介され格好の入門書となっています。

しかし現在この領域で、もっとも示唆に富む刺激的な研究を続けているのはスイスのマックス・リュティです。彼は、一次元性、平面性、孤立性といった独自の言葉で昔話の様式を見事に表現しました。リュティの業績は小沢俊夫、野村 玄などによって精力的に紹介されてきました。ことに小沢俊夫は、『世界の民話』や『昔話とはなにか』に見られるように、リュティの理論を基礎として日本の昔話の独自性の解明に努めています。

リュティ自身の著作の中でも『昔話の本質』と『昔話の解釈』は、「赤頭巾」や「白雪姫」のような具体的な話にそって彼の理論を展開したもので、初心者むきの入門書として最適です。